横綱昇進（下）

谷風以来172年ぶり

初場所で平幕・大栄翔(27)が優勝した。埼玉県出身では初となった。その際、都道府県別の優勝力士分布図が新聞各紙で展開された。山形は「柏戸（5回）」と表され、東北6県中唯一のゼロが宮城県だった。「アレッ」と一瞬、意外な感じがする。強豪横綱・谷風は仙台出身である。銅像が市中心部の勾当台公園に建っているほどだ。

思い直すと谷風は江戸時代の力士だった。明確な「優勝制度」が出来たのは明治42（1909）年から。江戸時代は年間2回の本場所開催だったが、谷風の戦績を置き換えれば21年間で21回の優勝となり、大変な強豪だった。そして柏戸は伊勢ノ海部屋出身として172年ぶりの横綱誕生だった。

腰高の矯正求められ

直弟子・柏戸の躍進によって、相撲部屋としての本格的な再興を示した伊勢ノ海親方（第10代）だが、弟子の急速な出世につれ、指導法も調整されていった。15人ほどの小部屋から出た「部屋の米びつ」が相撲界全体の宝になったからだ。

柏鵬一方の雄だけに、周囲の期待は高まるが、その分注文も多くなる。「相撲界を引っ張っていくには稽古量が少なすぎる。腰高の欠点は土俵際で腰を下ろすことで直せるはずだ」と横綱昇進時にも親方衆、相撲記者たちから再度見直しを迫られた。

柏戸自身は自らに稽古量を課してきたつもりだったが出羽海、二所ノ関の各一門の大きな部屋に比べれば稽古量が少なく、工夫がないのは事実だった。当時43歳の師匠は柏戸に対しては欠点に目をつぶる指導法を貫き、突っ張りを利した攻撃相撲による腰高もそのままにしてきた。

注文は期待の裏返し

そのあたり棚上げされてきた課題が23歳目前の若い横綱昇進時に蒸し返されたのだ。また番付を上げるに従って、柏戸自身に自覚を促し、口を酸っぱくした指導は控えられた面があった。それでも時に「お前への提言・注文は期待があってのことなのだから」と柏戸に語りかけた。ただ柏戸は「そんなに難しいことを言われるなら横綱にならなくてもいいです」と答えることがあった。柏戸自身は師匠の精神的負担を気遣ったつもりだったが、飾り気のない性格によるぶっきらぼうな言い方にも見えた。

相撲は番付社会。師匠は平幕筆頭止まりだった。それを追い越して大関、横綱に上り詰めた弟子を頼もしく見上げるとともに、横綱昇進後、指導法を巡って師匠自身も思案するのだった。

自覚胸に横綱出陣

昭和36（1961）年、9月秋場所後、大鵬と同時だった横綱昇進行事は使者を迎え入れた9月27日から麻もみ、綱打ち、翌10月2日の明治神宮の横綱推挙式まで、滞りなく進んだ。途中双葉山の時津風理事長が着物を脱ぎ、ステテコ姿になって、せり上がりを指導したこともあった。

柏戸も柏鵬新時代の期待にどう応えていくか。さらなる自覚を求められていることを胸に刻みながら、横綱としてスタートを切ることになった。＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

綱打ち儀式は紅白のねじり鉢巻きの付け人たちが柏戸の腰に合わせ綱を調整していった

時津風親方（右）からじきじき、雲龍型のせり上がりを学んだ

北海道120回でトップ

○…出身地別優勝回数では120回の北海道がダントツ。大鵬32、北の湖24、千代の富士31が目立つが計13人の優勝力士がいて、相撲解説でおなじみの北の富士は10回。東北では青森が37回でトップ。土俵の鬼と初代若乃花（10回）はじめ10人の優勝力士がいる。モンゴル88、米国27の外国勢も目立つ。ゼロは宮城、静岡、京都など11府県。

毎週火曜日付に掲載